

五線譜に夢と希望を託した作曲家

歌は、時にワンフレーズしか思い出せない場合がある。それが題名であったり、歌詞の一部であったりする。「いつでも夢を、いつでも夢を」とか。「サンドイッチマン、サンドイッチマン」とか。「有楽町で逢いましょう」、「潮来の伊太郎」等々。

これらの歌謡曲を世に送り出した人物は、日本作曲家協会会長も務め、死後「国民栄誉賞」を受賞した吉田正(1921-1998)である。生涯に約2,400曲の作曲を手掛け、歌を通して国民に夢と希望を与え続けてきた。

吉田正(以下吉田と略)は大正10年(1921)、茨城県多賀郡高鈴村助川(現日立市鹿島町)に父一三郎、母タニの子どもとして生まれた。昭和10年(1935)、(株)日立製作所が運営する日立工業専修学校機械科に入学する。

吉田はこの頃からギター、アコーディオンを独学で習得。バンドを作って自作曲を演奏していた。同校を卒業した昭和14年(1939)、吉田は「わずかな身の回りの品と一本のギター

だけを抱え」(『吉田正・私の履歴書』)、東京へ出た。

上京して間もなく吉田は「当時の京橋区榎町三丁目にあった増成動力工業という会社に職を得た」(『同・私の履歴書』)。20歳の時、徴兵検査で甲種合格。翌年の昭和17年(1942)、当時の水戸陸軍歩兵第二連隊に入隊。本隊があった旧満州国黒河省に移った。

吉田は戦争が終わった昭和20年(1945)から約3年間、旧ソビエト連邦シベリア地区で抑留生活を送った。戦場で生死をさまよい、戦争が終わったら極寒の地で過酷な労働の日々が続いた。

しかし、この極限下でも吉田は歌を忘れることはなかった。「抑留中に二、三十曲の歌を私は作った。捕虜仲間やロシア人労働者に、ちびた鉛筆をもらったりして、樹木のそいだ皮やセメント袋の切れ端などに歌詞を書き、五線を引いてメロディーを作った」(『同・私の履歴書』)。

吉田正

Yoshida Tadashi

昭和23年(1948)、吉田は本土に復員した。その年、NHKラジオ「素人のど自慢」でシベリアからの復員兵が「異国の丘」という歌を歌って合格の鐘を鳴らした。

この歌は作曲者が不明だったが、この歌を聞いた当時の日本ビクター(株)(現株)VCケンウッド)が、「これはヒットする」とレコード化を思い立った。

これがきっかけとなり、NHKは作曲家探しを始めた。吉田もこれを知り、知人同伴で局側に自身の曲であることを伝えるが、物的な決め手がない。しかし、遂に決定的な証拠が出てきた。八王子在住の復員兵の一人が古びた一冊の手帳を局側へ提出したのだ。

「そこには、『異国の丘』の原曲である『昨日も今日も』の楽譜と、作詞・作曲者として私の名前が、はっきり書かれていた」(『同・私の履歴書』)。これで吉田が作曲した「昨日も今日も」のメロディーに別人が歌詞を作って当てはめて、「異国の丘」ができあがっていたことがわかった。

これが縁となり、吉田は昭和24年(1949)に日本ビクターの専属作曲家として同社へ入社

する。以後、吉田は、戦後の歌謡史に残る数々の名曲を生み出した。その功績は、生まれ故郷の日立市に建てられた「吉田正音楽記念館」で見ることができる。(文中敬称略)

主な参考文献

『生命ある限り—吉田正・私の履歴書—』(平成13年、財団法人日立市民文化事業団発行)、『吉田正—誰よりも君を愛す—』(平成22年、金子勇著、ミネルヴァ書房発行)等。



「吉田正音楽記念館」内に飾られた吉田正作曲のレコードコレクション=日立市宮田町5丁目(筆者撮影)

歴史ジャーナリスト

茨城県郷土文化研究会 会長
ヒタチノデザイン研究所 所長

富山章一

「歌は世につれ、世は歌につれ」